

田中研新聞

7人が田中研に仲間入り!

2014年
10月1日発行
第14号

2014年10月1日号
甲南大学知能情報学部田中雅博研究室 毎月発行
http://canonion.is.konan-u.ac.jp
編集長：大畔 裕 (M2)
編集委員：吉岡一樹 (M1)・宮尾翔太 (B4)



このほど、3年生7名が、田中研に配属された。研究室(ゼミ)とは、学生生活のハイライトとなるもので、良くも悪くも、学生時代の最大の思い出を作る場となる。単なる1科目として考えて入ってきた学生が、期待を遙かに上回るものを求められ、慌てるかもしれない。

大学生活の中で、将来君たちに求められるものは、如何に大学という組織を自分の味方につけて利用し、自分の財産となる基礎学力や専門知識を獲得する方法を身につけ、また、それを実践し、自己と他人との関係を調整させる能力を高め、困難なことを成し遂げたときの達成感を味わったかということであろう。容易なことではないからこそ、達成したときに意味がある。これは専門学校では到底得ることができない重たいものである。また、そ

3年生歓迎会を開催

後期が始まり、田中研究室に3年生の7名の新たな仲間が加わりました。そこ

れをさらに高めることが今の大学に求められている。24日の歓迎会では、今までのゼミ生に加えて新ゼミ生諸君と楽しく歓談できた。良い場所を選んでくれた幹事に感謝する。よき先輩として、後輩への指導力

を発揮している院生は、ずいぶん頼もしくなった。4年生は、これからのいよいよ本番の卒業研究に本腰を入れて欲しい。3年生は、これからの皆さんの活躍に大いに期待したい。(田中雅博)

で9月24日に親睦会を兼ねた歓迎会を私と細田君で企画し行いました。

歓迎会は参加者全員の自己紹介からはじまりました。田中先生の昔のお話が面白く印象に残っています。この自己紹介でお互いの名前と顔を覚えられたのではないのでしょうか。その後、各々で雑談がはじまり盛り上がりつつありました。私としては今回の歓迎会は3年生の学生全員に参加してもらったことができまして、大成功だったと思っています。これからも3年生を含めた親睦会を兼ねた企画を随時実施していき、研究室内での親交を深めていければいいと思います。次回は12月に忘年会を企画する予定です。今回参加出来なかった方も次回是非参加していただいで、みんなでわいわいと楽しむことで出来れば幸いです。(岡本直樹)

研究室で「ピリオバトル」

吉岡と細田が優勝

後期が始まり1回目のゼミでピリオバトルが行われた。ピリオバトルとは、発表者が好きな本を持ち寄り、本の紹介を5分間と質疑を2〜3分のセットを発表者全員が行ったあと、どの本が読みたくなくなったか投票を行い競いあうゲームである。このゲームは立命館大准教授の谷口忠大氏らが考案し、最近では日本全国の学校や企業、書店などでも行われている。

田中研究室では昨年初めてピリオバトルが行われた。それまであまり本に関心がなく、最近読書することが少なかったのだが、本に目を向ける良いきっかけになった。

吉岡一樹

株式会社ジェイビー「衝撃テストの珍回答おバカスペシャル600」、COSMIC MOOK
この本の内容ですが、小

細田亮佑

この本のジャンルは小説で京都を舞台に二人の主人公が不思議な出来事に巻き

込まれていく話です。主人公は京都大学の学生で、私(以下、彼女)と私(以下、彼)となっていて、彼女とはどんな物にも興味を持つ素直な性格、一方の彼はひねくれ者でいつも彼女の後をつけています。この本の話は4つあり、彼女と彼の2つの視点を交互に物語が進みます。簡単に説明すると1章では彼女がお酒を飲みながら先斗町を歩き回り、彼が後をこっそり張り付き達と出会い、最後には李白さんと言う高利貸しのお爺さんと借金を掛けて飲み比べをします。2章では彼女が京都の夏の古本市場を訪れ、彼は彼女に会うため潜り込みます。彼は彼女が欲しいと思っている絵本を先に手に入れるため、李白さんの熱いゲームに参加します。3章では大学の文化祭で即席演劇の主演を彼女が代行する事になります。彼は彼

女に会うため文化祭に潜り込みます。大学の中では即席演劇、草駝天のコタツ、文化祭の実行委員会の三つ巴が繰り広げられます。4章では李白さんの風邪菌(李白菌)が京都を襲い、京都を壊滅させます。なぜか健康体の彼女が李白さんに薬を届ける話になっています。今回の彼は李白菌に襲われ、家で寝込むだけです。

この本は「人との御縁」について書かれていて世の中には様々な出会いがあるものだと思います。また、文体が古風で京都の世界観に馴染んでおり、京都の土地やお酒など楽しめる作品になっていると思います。この著者の小説のほとんどは京都が舞台で、様々な作品で同じ人物や団体が登場するので興味を持った人は読んで頂けると嬉しいですね。



中高校で行われたテストの面白い回答を載せた本です。どういった面白い回答が載っているのかと言いますと、「赤血球の中の赤い色素を何という?」という問題に対して、回答が「ロビンマスク」という回答です。また他の問題では「十人〇〇、〇の中に漢字を入れ四字熟語を完成させなさい」という問題に対して、回答が「十人対俺」という回答でした。このようにおバカな回答集を載せた本です。ここで私がおすすめしたいこの本の読み方ですが、おバカな回答に対して想像、ツッコミをしながら読んで下さい。先ほどの「ロビンマスク」という回答に対して「赤血球の中にロビンマスクがおいたらびっくりするわ!」といった様に想像しながら読んでみると、「十人対俺」という回答に対して「誰と戦うねん!」と言った様なツッコミを入れながら読むことをおすすめします。このように読むことで様々な角度から読むことができ、この本の楽しみ方も増えます。またこの本はどのページから読んで読める本なので、あまり本を読まない方でも読めると思います。これからの季節は秋です。ぜひ読書の秋として読んでみてはいかがですか?

ナレシキロボットの展示を終えて

わかりやすさで幅広い世代に盛況

8月19日から約1ヶ月間、大阪駅前グランフロント内ナレシキロボットの展示が終了した。当研究室からは、野々口君の作成した、キネクトを応用したラジオ体操探点システム、田中のレーザーキャナを応用した来場者カウントシステム、Xtensionを応用した障害物検知装置などを展示した。今回の期間の前半では、今話題の、漫才ロボットの展示もあり、多くの来訪者を迎えて盛況であった。後半は漫才ロボットはビデオのみとなり、実物展示は当研究室のものだけとなったが、前半にも劣らない数の来訪者があった。

こういう場では、やはりわかりやすさが最も重要で、当方のシステムでは、ラジオ体操に多くの人が集まった。研究を始める前に、私は、カラオケの採点システムのようなものを作るようにと指示したが、その狙いはナレシキロボットと

大盛況！ラジオ体操評価システム

先月から続いていたナレシキロボット甲南大学の展示が終わった。休日の人数が多くてたくさんの人にラジオ体操の採点システムを体験してもらえた。漫才ロボットは9月頭に東京出張し、気がつけば田中教授のシステムだらけに。子どもたちの夏休みも終わり、来てくれる人も減るので、と考えていたがそんなことはなかった。むしろ夏休みより多い。

休日ばかり出勤だったため呼び込みをしているといつものまにか捌き切れないほどの人が来てブースに出していた5時間でも60人以上の人にやってみてもらえた。勤務時間を大幅にオーバーする日もちらほらあり、案内係の人からも絶大な人気のおかげで毎日喜んで3分間のバージョンをやってみてもらっていた。最終週には100点を出した客もいたらしく、最高点数を表示してか



院生4人には、毎日誰か1人、詰めてもらった。1日5時間であるが、「営業」の5時間は結構長かったに違いない。フロントの安田氏、小林氏をはじめとする職員の方々にも、当方の研究のPRのために、1日も欠けることなく詰めていただいた。心より御礼申し上げます。来年2月下旬からの1ヶ月も、いくつかまた出展させていただけるようなお話をいただいている。その際には、今回の反省をきっちり反映させて、さらなる成功を収めたいと思っている。(田中雅博)

バイクで琵琶湖一周の旅

学会発表が終わって一段落ついたのと、結局8月は旅行に行けなかったため、以前からの計画通り、バイクで琵琶湖を1周することに。まず滋賀に向かうために、阪神高速は使わず下道で西宮まで行って、一旦給油したあと名神高速に乗った。3号神戸線は下に通っている国道43号線もそれなりの速さで動いているので、あまり価値がないと思っただけ。ちなみにバイクで高速に乗るのは初めてである。料金を抜けたあとに待っているのは完全に未知の領域のスピードだ。決して調子に乗ってスピードを出し過ぎないことを頭において、まずは車の流れに乗ることを意識する。普段出さない速度域に入り、その後も速度が上がるたびに、これまでに感じたことがない風圧がかかるのがわかった。しかし、慣れるのにはそれほど時間はかからなかった。コケたら無事では済まないという恐怖はあるが、物凄く爽快感だ。事故が多いのもわかる気がする。



わたしの訪れた町

第6回 ロンドン

ロンドンと言わずと知れた、パリと並んでヨーロッパの大都市である。そのロンドンには何度も行っているが、実のところ、ロンドンに用事があって行ったことはほとんどなく、たいていは日本とヨーロッパの別の町の間の行き帰りのついでに立ち寄ったケースが多い。今でもそうだが、外国、とりわけヨーロッパに行くこと、私も気疲れする。精神

大群が登壇発表

日本ロボット学会

昨年に続き、今年もロボット学会で登壇発表を行った。今回の会場は福岡県の九州産業大学だ。前回の首都大での学会は、初めての学外での発表ということもあり、かなり緊張していたが、さすがに2度目ともなると、少し余裕が出てくる。学会の期間は9月の4、5、6日だが、私の発表は6日午後の後半、つまり最後のセッションである。5日の

佐和山遊園（本館が工事中だった）を訪れてからスタートした。長浜と虎姫の用事を済ませ、このあとは塩津を経由して湖西を南下するが、ここからは観光地などあまりない上に、バイパス道路も利用するので早い。道の駅マキノ追分峠で昼食をとって、湖北バイパス、高島バイパス、西近江路と進んで次の目的地の北小松に向かう。ここは砂浜が広がっており、小学生時代に親に連れてきてもらったことがある懐かしい場所だ。

ロンドンといえば、夏目漱石が明治時代に一人で長期滞在した町として有名である。夏目はイギリスが好きになって帰ったかというところではなく、体を壊し心からヨーロッパを嫌いになって帰ってきたようである。今でもそうだが、外国、とりわけヨーロッパに行くこと、私も気疲れする。精神

大学院生である残りの期間、研究をしつかり進めて修論発表会は納得のいくものにした。 (大群裕)

そのあとは2度目の給油を済ませて西大津バイパスに乗り、京都東ICから名神高速を使って帰宅した。今回の旅では2日間で369キロ走行して琵琶湖を1周することができた。今後の計画ではフェリーで小豆島に行ったり、本四連絡橋で四国に行き1周するつもりだが、そろそろ修論などで忙しくなる時期でもある。次に行けるのがいつになるかわからないが、距離や日程をのびしているところに行ってみようと思っている。(大群裕)

研究室対外活動予定

- 10月10日 田中教授、平生塾講師(テーマ:考える)
- 11月8日 自然科学研究科研究成果発表会(院生参加)
- 11月17日 田中教授、奈良先端科学技術大学院大学で講義

編集後記

先日田中研の卒業生たちと遊びに行きました。これまでも卒業後の交流があったので、先輩後輩の関係とはいえ、あまり遠慮せずに関わることができそうです。(少しは遠慮するべきかもしれないが。)これからも、もっと上の代や今の後輩、またこれから入ってくる学生とも交流していきたいと思っています。(大群裕)